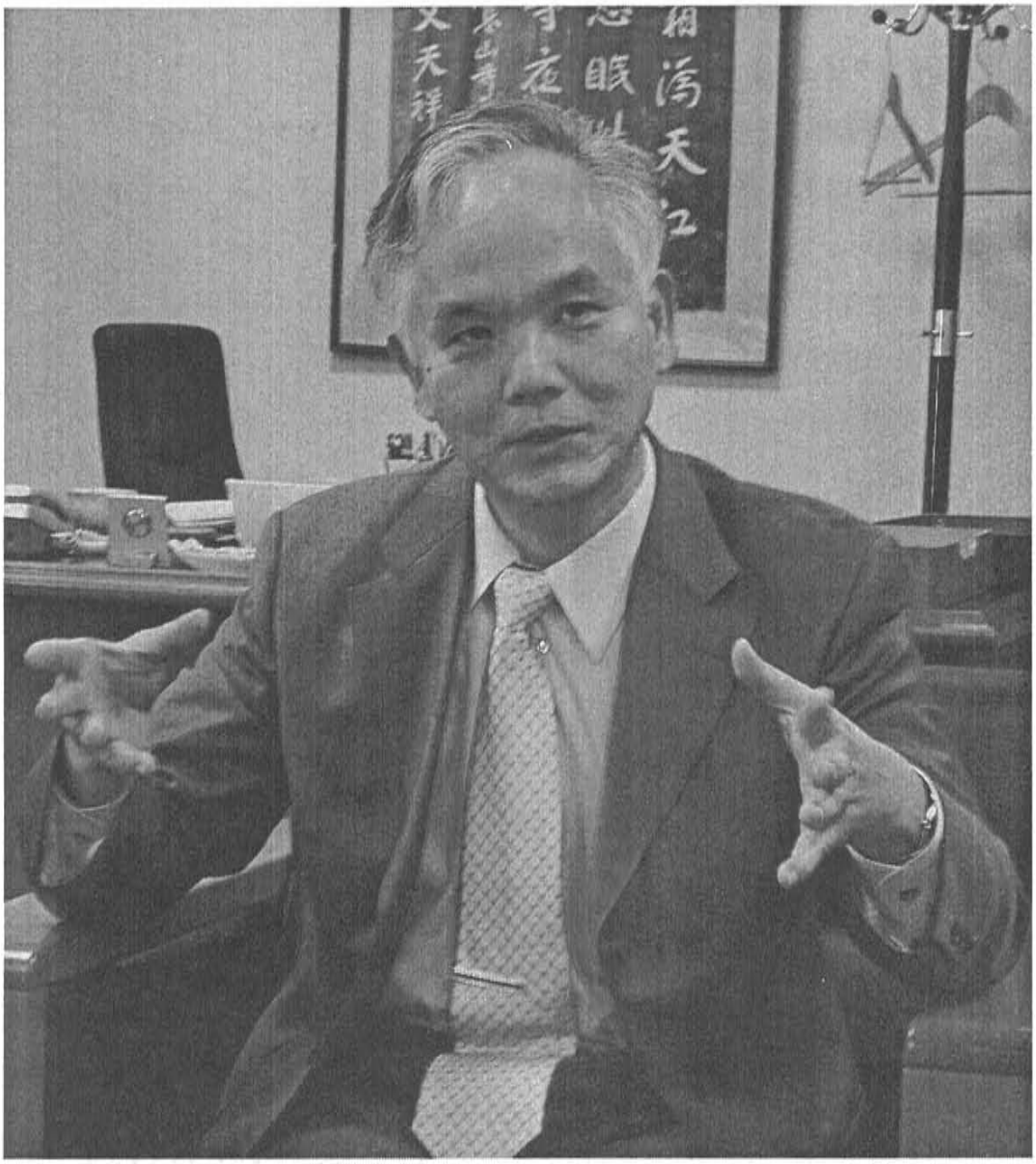
教職員・院生版生協だより

かけはし

No. 266
2006年 7・8月号
発行 名大生協理事会
編集 名大生協教職員委員会
☎ 学内線 7540, 学外線 781-1111



「教えた瞬間から情報が古くなっていくのは、生死に直結した学問の特徴である」と語る濱口道成医学系研究科長

名大生協のホームページ（URL） http://www.nucoop.jp/
教職員委員会への e-mail あて先 kyoshoku-c@coop.nagoya-u.ac.jp

もくじ

主張〈生協のフィールドワークで歴史認識を深めよう〉------3

【インタビュー】

学問の魅力、学生、生協への期待--トップインタビュー⑭

濱口道成医学系研究科長 ----------4

【報告】

理学部利用者懇談会 ----------22

夏の組合員交流企画報告 ----------26

教職員委員会の活動日誌 ----------25

【記事】

魔言「制限が自由の条件」「問処道得–問うことのない者に答えは現れない」「失せ物」----------16

新フィールドノート–その 95 –

「カンブリア紀の大爆発」----------18

ニュースに一喝！

「材割り」「中休み」「インフルエンザ対策」----------20

かけはしの輪 ----------24

アンケート・クイズ解答用紙 ----------28

CO–OP　QUIZ＜Logic＞ ----------29

化石山に行こう ---------- 裏表紙

主張

生協のフィールドワークで
歴史認識を深めよう

今年6月2日、名大祭企画の一つとして、映画「パッチギ!」(井筒和幸監督)の上映と、安川寿之輔・名大名誉教授の「日韓問題を考える―無知を『知る』ことから『青春』の奪回を始めよう」という講演会(主催＝名大平和憲章委員会)が開かれました。

講演で安川先生は、十数年間毎年続けている学生へのアンケートで、「太平洋戦争をふくむ『15年戦争』＝アジア太平洋戦争の『開戦の日』と『敗戦の日』はいつか?」と尋ねてきたが、『敗戦の日』の正解は、始めたころの正解者80%から、最近では65%前後に低下したが、それでもまだ過半数は正解である。ところが『開戦の日』の正解は、一貫して1%台で、名古屋大をふくむ6大学では、この6年間正解はゼロである、と話を切り出しました。

ところで読者のみなさんは、この質問に答えられますか。「敗戦の日」は(1945年)8月15日です。そして「開戦の日」は、(1931年)9月18日です(安川先生の設問では月日だけで、年は答えなくてよい)。

1931年9月18日とは、日本が中国にたいし全面的な侵略のきっかけとした謀略事件＝「柳条湖事件」(当時は「満州事変」と呼んだ)を起こした日です。

さらに安川先生は、「日本がもっとも長く戦ったのはどの国か? 次の中から選びなさい―アメリカ・中国・イギリス…」という質問に、アメリカと答える学生が多い、実際は中国なのに。これら毎年のアンケートの結果から、「日本の青年はアジアについて、あまりに無知すぎないか?」、「日本の学生像の現状は深刻そのもの」と警鐘を鳴らされました。

アンケートに見る今日の学生像は、歴史は、たとえば「1940年、日独伊三国同盟」のように、項目として暗記するものであり、そのときどんな力が働き、何が起きていたのかと認識するにはほど遠いものであることが見て取れます。

名大生協教職員委員会は、今年3月21日、豊川市の名大太陽地球環境研究所を訪ね、キャンパス内の旧海軍工廠の遺跡を見学しました。遺跡は、1945年8月7日の朝、25分間の空襲で2500人が命を奪われたことをイメージさせるものでした。

9月17日(日)には、岐阜県瑞浪市で行われる「中国人殉難者慰霊祭」に参加します。瑞浪市で行われるのは、戦争末期、敵国・中国人に地下壕を掘らせ、過酷な労働を強いて39人が犠牲になった現場だからです。この日に行われるのは、「9・18」にいちばん近い日曜日というのがその理由です。

大学生協連は、今夏もPeace Now ヒロシマ、―ナガサキ、―オキナワを計画しています。また大学生協連東海地域センターも、「オキナワの旅」を計画しています。

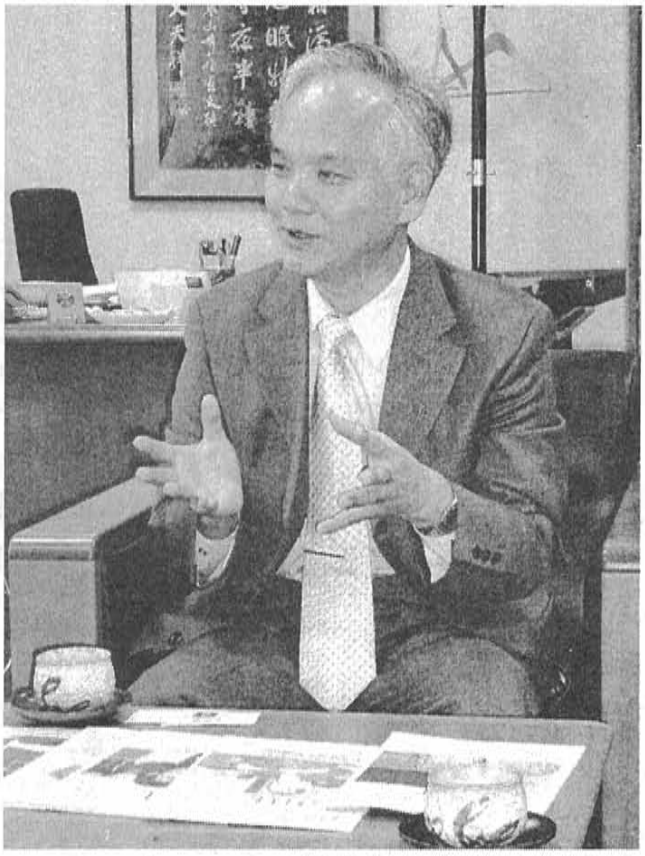
歴史認識を深めるために、さまざまな書物から学ぶことも大いに意義があります。が、生協がすすめているフィールドワークと討論で学ぶ方法は、歴史とともに現実と未来をダイナミックに、イマジナブルに学ぶうえで有効です。

いま、「この国のかたち」(司馬遼太郎)を左右する大きな政治的課題が俎上に上っています。それは、教育基本法を「改正」し、「国を愛する心」を養うことを明記する。地球規模で展開するアメリカ軍の「再編」に協力し、米軍と自衛隊の連携強化(または一体化)をはかる。憲法「改正」の手続きを定める「国民投票法」を制定する。憲法九条(第2項)に定めた「戦力を持たない」を削除し、「自衛軍」を保持すると明記する等々です。

こうした動きにたいし、私たち一人ひとりが主権者としての意思表示が迫られています。リアリティのある歴史認識は、これらの判断に役立つことでしょう。

学問の魅力、学生、生協への期待
―トップインタビュー ⑭

濱口 道成 医学系研究科長



（4月17日 研究科長室にて）

濱口道成（HAMAGUCHI, Michinari）教授
大学院医学系研究科長
専門分野
1. 腫瘍生物学　2. 腫瘍生化学　3. 細胞生物学
現在の研究テーマ
1. 癌関連遺伝子の構造と機能
2. 癌細胞のシグナル伝達系
3. 癌浸潤転移の分子機構
4. 癌細胞の足場非依存増殖機構
5. マトリックスメタロプロテイナーゼ活性化機構

加藤　まず、先生のご専門の分野にかかわるトピック的な話を伺いたいと思います。二つ目は、先生のこれまでの歩みを振り返っていただきながら、特に若い読者への言葉をいただければということ、三つ目に、大学も変わってきているのでそのあたりの話、またその中で生協に対してもご意見をいただければと思います。

中部地区の医療の中心

濱口　個別的な話に入る前に、医学部という学部は、大学の中でもすごく特殊な位置を占めることをコメントしておいたほうがいいと思います。東山から地理的に離れているというだけではなく、非常に特殊な理由――ここは毎日俗世間が入ってくるところなんです。毎日外来の患者さんが2千人、病院ベッドが千床あって、それだけでも大学外の人が常に3千人ぐらいいるわけです。不特定多数の市民が常に病気という共通項を持って……。これはたぶんどの学部にもないことだと思います。

もう一つの大きな特徴は好むと好まざるとに関わらず、この中部地区の医療の中心になって現場を支えているということです。名大病院には千床ありますけど、それ以外に600床以上あって名大医学部から人材がたくさん行っているという病院は30病院ぐらいあります。これを関連病院と言います。300床くらいのクラスになると50病院ぐらいあります。だから600床が30で1万8千ベッドですね。それに名大の千ベッドで2万

ベッド近いですね。ほかに300床以上が70ぐらいありますから、これだけで2万5千ベッド。ですから4万5千とか5万とかそういうベッドの病人の方々を、名大で勉強した人々が診療にあたっているわけです。

さらに大きなことは、こういう関連病院で研修をされるという医学部卒の人がとても増えています。名古屋大学の卒業生は100人ですが、今年度、関連病院で初期研修をする、卒業後2年間の研修をする人が、第一段階で499人、約500名の人が研修をされています。つまり、卒業生の5倍の人が集まってきて、何らかの形で研修をしている。さらにその人たちのかなりの部分がこの大学病院に必ず戻ってくる。医師の教育というのは生涯教育ですから、卒業してしまえば終わりであとは同窓会に顔を出す程度という薄いつき合いではなくて、卒業してまず大学の先輩たちがずっと作り上げてきた病院で研修を受けますし、そこで数年、長いと10年ぐらい働いた後にもう一度大学に帰ってくる。その人たちは大学院に入ります。30歳過ぎて学生になる。そこで数年間勉強しなおした後に、またその病院の中堅スタッフとして出て行くんです。さらに病院で働いた人が病院にずっと残る場合もありますし、開業される人もいる。名大を卒業した人も、名大以外の大学を卒業して名大の関連病院に入ってから名大に研修に来られる方も、みんなその生涯を通じておつき合いしていきます。だから一種古いギルド的な要素を持っていますが、そのシステムの中で中部地区の医療のレベルが安全安心で常に世界の進歩に遅れない最先端の医療が提供できるような作業を毎日やっています。その中で例えば安全の問題も出てきますし、先端医療をどう展開するかとか、それを教育の中でどう活かしていくかというのが医学部の教育なんですね。それが大きな特徴です。

情報量は500倍に

もう一つの特徴は、医学医療の情報がものすごいスピードで増えている事にあります。戦後まもなくの頃の医学の知識を仮に1とすると、いま学生が基本的に覚えなきゃいけない医療の情報は500倍から700倍です。これはすさまじい量です。それを同じ期間の6年間でこなしていくような教育システムを作ることも大変難しいところがありますし、学生にも非常に高いレベルが要求されています。それが医学教育の大きな問題です。ところがその500倍、700倍の情報を単純に学生に教えたとしても、教えた瞬間に一部の情報はもう既に古くなっています。これは俗世間の人の生き死にに直結した学問の特徴です。医療という学問は、永遠不変の真理で動いているわけではなくて、常にその時点その時点での最先端のデータとEvidenceで正しいと思われることをやっていますが、それがある日やっぱり副作用がでてくるということがあったりしますから、常に真理を検証し改善していくことが必須です。だから、教えなければならない教育の内容も、社会が医療医学に要求するレベルも急速に高くなっているんです。また、人工呼吸器をはずす問題とか、難しい問題もいっぱいあります。単純に500倍になった知識だけを教えていてもいけないので、倫理的な問題、法律的に見ても正しい倫理というのをきちんと教えていかなければいけないんです。例えば、末期患者本人から望まれて人工呼吸器をはずした時、いったい何が起こるかということをきちんと教えなければいけない。善意でやったことがその人の意思を壊してしまうことになるし、患者の予後を止めてしまうことになる。この判断は難しい。実際は、結論出ていないんです。人工呼吸器の問題は。そういう問題を常に一人ひとりの学生にどう教えるかという難しいところがあります。

それから現実の国民生活に直結した問題として、最近の国の政策というのは総医療費抑制ということが主張されていて、経済性が優先された状態になっていますね。

中部地区の医療の中心として現場をささえ、安全安心で世界の最先端の医療を提供します。

どこの病院でも治療できなかった患者を最後には受け入れる最終終末病院として。

国民の健康で幸福な最低限度の生活を国がなかなか保障しないようになりつつあるように僕には見えます。そのなかで我々としては独立法人になっても、どれだけ赤字があってもそれをやっていかなければならない。

インタビューに答える濱口道成教授（正面左）。（4月17日、医学系研究科長室にて）

最終終末病院として

いま僕は学生に、医学部教育は三重苦の状態になっている、と言っています。外的要因・知識の問題・倫理的な問題という問題ですね。それでも教えるのをやめましょうとか、もう少し抽象的な学問にしようとか、そういう選択肢は我々には絶対ないんです。中部地区のどこの病院でも治療できなかった患者を、最後は名古屋大学が受け入れるという最終終末病院として。例えば肝移植がそうです。この地区ではうちしかやってない。例えば死体肝移植をやれば1千万円近い赤字になります。それでも病院としてはそれを選択しなければならない。独立行政法人下であっても。こういう矛盾した難しい問題がいっぱい吹き出しています。

その中で研究は、今は現場に直結した課題をやっていかなければいけないということが大きな問題となっています。実際に診断治療に役立つような課題を開発して実用化へ結びつけていくことも必要ですし、一方で倫理的な問題を含めて教育にその課題をどう乗せていくか、我々も手一杯ですね。新制大学になってから60年間基本的に医学部の教育は6年制というのは変わっていない。そこで詰め込まなければいけない情報量は500倍になっている。この矛盾というのは深刻です。だから、10年くらい前から医師過剰時代が来ると言われていますが相変わらず医師は不足しています。その本質的な問題はかなり国民の価値観にもリンクします。医師の絶対数は増えています。絶対数は増えているが手が回らない。つまりきちんとした医療を提供しようとすると我々の取り得る道は専門化です。どんどん専門分化していって最先端の医療をやる。そうすると同じことをやるのに一人でやっていたことが何人も必要になってくる。当然医療コストも上る。そういう問題があって、一方で一般医というのが養成しづらい。情報量が非常に多いためにどうしてもすべてをマスターすることが不可能になります。一部の専門をしっかりトレーニングするということでやっていると、ジェネラルな病気を見る人材がなかなか育ちにくい。これは桎梏状態になっている、システムが。

それからもう一つ、学生が一人前になるのに時間がかかるんです。外科系だと一人前のことができるのに大学を卒業して最低10年は必要です。脳外科だったら20年ぐらいですかね、40歳過ぎてようやくまともな治療ができる。こういう大変なシステムをかかえているんです。これを少ない人材でRemandに応じて配備していかなければいけないというところに、研究は面白いとかいう言い方で語れないという状況があるんですよ。

それなら大学でどういうことをやっていくか。独立行政法人になって非常に難しいところは病院の経営が大学本体の経営にもかなり影響を与える現実があるんですね。大学の予算の4割が病院予算になりますから。病院がちょっと調子を崩してしまうと、医学部ひ

とつくらいの予算が簡単にすっと一ヶ月で消えます。それはすごく責任が大きい。病院長の一心にかかっているんですけど。それで一方で最終末病院として国民の医療の最後のところを引き受けるという場を負わされているところが本当に辛い。そういうことがここ数年の流れの中であるんですけど、そんなことを聞かされると医学部は学生が来ない……。（一同笑）

医学は人を惹きつける

医者の給料もすごく安いんですよ。例えば今ここで働いている30代後半の人の年収は５００万から６００万ぐらいです。それで24時間はりつけで働いたりするんです。36時間ずっと泊り込んで家庭崩壊寸前…。ほとんど使命感でやっているんです。ただその使命感でやれるということはそれだけ医学医療というのは、それだけ厳しいハンデがあっても人を惹きつけるものがある、人を駆り立てるものがあるのだと思います。それは何かというのを考えてみると、他の学部の先生から叱られるかもしれないですけど、19世紀に機械文明が起こって20世紀に非常に発展してＩＴとか20世紀末から展開してきていますけども、最終的にやっぱり人が増えていろんな公害とか、資源の枯渇化とかいろいろ起きている中で、学問の中心は人間に戻ってくると思います。21世紀には。その人間がいかに地球と共生していけるか、その中で一人ひとりが安心で幸福な生活ができる、科学がそういうサポートをきちんとできるかどうかです。その中で医学は、現場と直結した部分で人間というのは何かというのを物質面、あるいは異常な症状から演繹的に明らかにしていく学問であるし、その中で明らかになってきた事実を基に一人ひとりの健康を支えて幸せを作り出していく学問としての医学の得がたい魅力というのは絶対あります。だからこれだけ学生が集まるし、安月給でもみんな大学病院で働いている。大学院生は本当にかわいそうな状況です。妻子をかかえて学費を納めて仕事をやらされて。それでも魅力があってやってくれていると思います。僕たちはもっとそういうところを変えていかなければいけないと思うんですけど。独立行政法人になったということは、学部長が自分の研究だけをかかえていられなくなってしまったとか、一つの悲劇をもたらしていますね（笑）。

加藤　そう言われていますが、このあたりで先生のご専門のお話を。

ガン―新しい概念で治療

濱口　僕はガン遺伝子をずっとやっています。30年近くやってきていますかね。ガン遺伝子が見つかって、その機能が明らかになり、さらにそういう遺伝子群がどう働くことによって実際に人の悪性腫瘍ができてくるのかを、僕はずっと見てきました。いま日本人の死因の3分の1はガンになっています。そのガンの悲劇というのは結局罹る人の多くが壮年なんです。40代後半から50代が主ですね。そういう人たちがガンになると個人としても痛みを伴いますし、壮絶な生活が数ヶ月から数年あって死んでいくわけです、悪性の場合は。その中で一番の問題は本人が絶望的になることと、家族――中学生とか高校生をかかえている人も多いんですね。一家の柱なり奥さんなりがガンで倒れたりすると二次的三次的にたくさんの人の人生を変えてしまう病気なんです、これは。やっぱり風邪とか腹痛とはちがうのはそこなんです。外科的な治療から始まって集学治療というのが開発されて、タイプによっては早期発見、早期治療でよく治る。例えば胃ガンとか子宮頸ガンとかはそんなに怖い病気でなくなってきましたが、まだ手がつけられないようなものもいくつか残っている。これをどういう新しい概念で治療に結びつくような研究が展開できないかというのが今ずっと考えているところです。何故ガンができるのかという学問的な興味以上にそこは力が入っているところです。分子標的治療法というのが流行りのキーワードになっていますが、ガンを

医学医療は、厳しいハンデがあっても人を惹きつける。21世紀、学問の中心は人間に戻る。

起こす遺伝子とか、ガン腫瘍が悪性になってくるときに働いてくる遺伝子とか、それがどういうものかということがかなりいくつかのガンで分かってきていて、それをいかに抑えるのかということを分子レベルで明らかにすると従来の方法とは違う制ガン療法が開発できるだろうと、みんな今ここ数年間考え始めているんですね。その流れによっては一部は例えば肺ガンで成功例が出ていますが、もう少しガンになってもガンと共生しながら残った余命というのをある程度充実したものに変えられるような時代が来るだろうと。完全にガンを制圧するのはまだまだ長い道のりがあります。もともと僕は基礎研究者として始めましたが、今はうちの教室の半分以上の人たちは臨床の外科医とかガンを専門にしている内科医とかが、大学院生として研究に参加していただいて、いろんなお仕事をやっています。

加藤　やはり30年近くやられたということですが、10年単位ぐらいで見るとずいぶん変わってきているんでしょうね。治療の仕方とか考え方とか。

生臭く、血みどろの研究

濱口　考え方の大転換が起きたのはまずガン遺伝子が見つかったことでしょうね。それは１９８０年代でした。それまではガンというのは単純に遺伝子がランダムに変異することによって起きるんだろうという考え方だったんですが、ガンを起こす特定の構造を持った遺伝子が見つかったのが80年代です。それから90年代になって、今度はガンを抑えている遺伝子が見つかった。この遺伝子がなくなるとガンが起きるという。これも画期的な展開です。ガンの研究で生物学的に面白いと思われることは、我々の研究というのは異常を見ることで正常な機能がどう制御されているかということを見ているんです。異常な現象を見る中で正常な機能がわかるという。鏡を見ると自分が見えるということです。

ガン遺伝子とかガン抑制遺伝子という研究で出てきたのは、一つはプロトオンコジーンというコンセプト。ガン遺伝子の基になっている遺伝子のことです。原ガン遺伝子とも言います。それからガン抑制遺伝子の研究が展開して、細胞周期の制御因子がいっぱい見つかったことです。だから生命の本質的な現象がガンの研究からかなり展開されていっています。プロトオンコジーンというのは基本的にほとんどのものが増殖因子のリセプターとかシグナル伝達因子の遺伝子です。これは細胞がどのようにして増えるかとか、神経細胞になるのはどのように刺激が入るのかとか、そういうものを全部制御している遺伝子群のことです。

正常細胞の増殖分化を制御している遺伝子群が、ガン遺伝子とオモロジーのあるものとして見つかっていったんです。これは１９８０年代から90年代にとても進みました。いま残っているのは、残っているというか、最近重要になっているのは、悪性になるということはどういうことか、臨床面からも重要な問題ですが、いわゆる腫瘍の中には良性と悪性というのがあります。良性というのは簡単にいうと治療すれば治る腫瘍です。悪性というのは外科的な治療がなかなか及ばないような非常に増殖が早くて体のあちこちに転移浸潤していくという――例えばアナウンサーで逸見さんという方がだいぶ前に亡くなりました、あれは腹膜播種ガンという、おなか全体がガンになって、ガンの細胞が種を撒くように拡がっていく。そういう腹膜播種がどういうメカニズムで起きるかとか、浸潤していくときにどういう酵素が活性化され、制御されて細胞が動いていくか、こういうのが今かなり分かってきた。そしてこれをどう止めるのかということが、患者さんの生命をどう延ばすかということと直結した問題です。

我々の研究というのは。生臭いというか血みどろの部分がいっぱいあります。実際に患者の組織を調べたり、患者のガン組織から遺伝子を取ってきて調べたりということをやっています。そういう管

理でも、倫理委員会という委員会があります。この委員会活動は、倫理面からチェックをどうするかというコンセプトから医学部が最先端で進めている作業だと思います。東山の研究ではあまりそういうことは議論にならないと思います。このサンプルを研究に使っていいのかどうか。外部の患者代表とか弁護士の方とか仏教哲学者とかにチェックしてもらうんです。適切な管理がされているか。一番よく聞かれていることは、患者の組織を使う場合は非連結匿名化というのがあります。要するに元が誰の組織から来たのかわからないようにしろ、しかも病状に合わせた変化であるということを見ていくことがちゃんとできるようなシステムにしなければならず非常に難しい。そういうシステムをきちっと定着させ、動かしていかなければいけない。研究の対象が現世に直結していますので、倫理面の管理も責任の管理も、いろいろな意味で管理体制をきちんと押さえていかないと問題になったり、サンプルをいただいた患者さんに迷惑をかけたりということが起こるんです、ここでは。

加藤　一般の方もたくさんいらっしゃるという中で、患者のご家族とお話をされることも多いのかなと思うんですけど。

濱口　病院長ほどは毎日会いません。僕はそこまでは出て行かないです。私は学務中心にサポートする形になります。例えば倫理委員会とか。そういうところで患者さんに会ったりします。

患者組織の代表にも

医学の教育では、10年前から「医学入門」を最初に作り上げました。そこでたとえばコムルという患者組織の代表で、辻本さん――元は名古屋の主婦の方なんですけど、大阪で患者組織を立ち上げた方で――に授業をやってもらっています。また仏教哲学の先生にも。名大の医学教育では、一年のときに介護実習をやっています。介護施設とか老人のいわゆる老健施設に学生が行って介護の実習をするんです。脳性小児麻痺になった人たちがどういう苦労をして生活をしているか。それでも彼らは社会に出て生活したいと思っている。そこに学生は顔を出してみて体験するような場を作っているんです。そういう教育も必要なんです。でもそれだけだと今度は500倍の知識が身につかない(笑い)。新しい情報はすごい速さで増え、ゴールがどんどん遠くなる。学生自身がどういう目標に向かって勉強しなければいけないのか、どういう道を進んでいるのか分かりにくくなっているのは大きな問題です。決して彼らの責任ではないんですが、意欲が低下していったりということもあり、ゴールを感じさせながら今の苦労を超えさせていくような教育のサポートが必要ですが、なかなか難しいことなんです。

加藤　附属病院が新しい建物に変わって、市民から見ても随分変わったなと思われていると思います。さらにこれからどういうふうになっていくのか、具体的に見えてくるところはどんなふうになるのかというあたりをお話いただけますか。

濱口　独立行政法人になってはっきりしてきたことは、ここで提供していく医療の内容と質、それからここで行われた教育、人材育成が名古屋市民なり愛知県民なり中部地区の人たちにどういうふうに反映されるということが我々にとって一番大事なことだと思います。例えば100年後の医学を語ることよりも、我々はどういう医学部の組織展開をしていかなきゃいけないのかということが常にあります。新しい中央診療棟を作ったり、病棟を整備していくということは、患者さんへのサービスをよくしていくことです。それと人材育成――卒業生の5倍以上の人が集まる現状としては――が大きな課題です。一方で医学研究をどう進めていくとかという課題があります。

医療のヘッドクォーター

また、名古屋大学の医学部というのは東大や京大、阪大などと違って特殊な位置を占めています。名古屋大学病院がつぶれると

医療の内容と質、人材育成が愛知・中部の人たちにどう反映されるか、が一番大事なこと。

名古屋市内や愛知県だけでなくて中部地区全体に大きな影響があります。つまり歴史的に中部地区の大きな病院は、この130年我々の先輩がどんどん立ち上げていて、そこへ卒業生が行く形で連携が進んできました。今はそこに研究に来た人たちがまた名古屋大学に来て、さらに中部地区に広がっていく。そういうシステムになっていて、名古屋大学医学部の経営がおかしくなってつぶれると中部地区の医療のヘッドクォーターが完全におかしくなる。中部地区全体の医療が悪くなるのは明らかです。悪くなるのに時間がほとんどかからないでしょう。だから診療で負担が大きい。同じ数の卒業生と、東大の3分の1ぐらいのスタッフと10分の1ぐらい――もう少し多いかも――の国からの投資で、カバーしていかなければならない患者さんの数といったら膨大です。そういうことが宿命としてあって、好むと好まざるとに関わらずこの負担が増えています。現実には関連病院に来る人たち、名古屋大学医学部の研修方式が優れているということが学生に分かりはじめ、どんどん集まってくる。

我々いま初期研修というのを大学卒後2年やっています。これは名古屋大学が40年前に開発したやり方です。40年たって厚労省とか文科省が全国に広めました。

医療も研究も

現実に何が起きてくるかというと、全国から人がどんどん来て、大きな組織体がどんどん膨らむという現実があります。じゃあその医療だけやっていればいいかというと、名大は旧帝大というキーワードで括られるように、それだけでは済まない国の投資が入っているわけです。普通の一般病院としてだけ徹して効率性を考えて安全性を考えて医療に100%のエネルギーを集中したら我々は赤字になるわけがないし、ものすごく楽ですよ。けれども、一方で研究を展開していかなければならない。だからと言って、東大や京大のように研究にばかり大きく力点を置くこともできない。かといって一般病院のようなこともできない。この股裂き状態が現実にあります。これを少ないスタッフと100人の卒業生で展開していかなければならない。これが僕らの抱えている一番のジレンマです。

外部資金で教員ポスト

独立行政法人になってどんどん定員削減がすすんでいます。暗い話がいっぱい出てきています。効率化係数だとか運営交付金の削減。それから閣議決定では5年間で5%の人件費抑制をやれと。それだけを悩んでいても、あるいはその定員削減をやっていたら中部地区の医療は調子が悪くなり、人材育成もうまくいかないし、国民が期待している研究の展開はできない。で、我々が去年一年間主にやってきたことは寄付講座をどんどん作ることです。これは一つの道として展開してきたことで、いま医学部全体で11寄付講座が動いています。一つの学部分ぐらいの人がそこにいて、23人の教員がいて、他にもCOEだとかで雇われた人が十数名おりますし、任期制ではありますが50人ぐらいの人が教員として、国からの予算をいただかない状態で働ける状態を作っています。我々はもっと条件を良くしたいんですが、しょうがない。とにかくやっていることは不完全な状態でも医療の質を落とさず、人材をプールできるポストを造り、研究展開を自立でやれるよ

うにする。外部資金でポストを作って、さらに外部資金を獲得することによって体力をつけるということを一つの戦略として去年1年間の活動でやってきました。ずいぶん若い人が働ける場が増えました。それは自信を持って言えます。

ライフトピア拠点構想

もう一つ、一年ほど前から大幸町の再開発プロジェクト――ライフトピア拠点構想というのを立ち上げ、力を注いでいます。特徴は、寄付講座だけで運営が始まったことです。去年の年末からスタートし、この4月1日、寄付講座3講座が出揃いました。教員は7人ですが、スタッフを含めて20名ぐらいの人材が動き始めています。そこへ保健学科の先生方が人材育成のプログラムをいろいろ考えています。日本は数年後には65歳以上の人が人口の3分の1とか4分の1になりますけど、そういう時代を迎え、超高齢化社会をサポートするような医学医療の開発をやっていこうということです。今年はそのスタートの年になります。

これらは独立行政法人を迎えて我々がどういうスタンスで動いていかなければならないか、主に展開してきた二つのことです。外部資金でのポストの獲得と新しい研究拠点、超高齢化社会への展開。

多彩で苦心の人材育成

それから大事なこと忘れています。学生の人材育成です。さっきも言いましたけど、情報が500倍になっている、倫理的にも技術的にも要求されるレベルが高くなっているということで、去年から教授会で議論していて、いよいよ平成19年から採用する新しい大学院のシステムを検討しています。大学院教育を少し変えることによって、我々なりにこの難しい問題にチャレンジしていこうと。何が要点かと言いますと、医学情報が急速に増えていると先ほど言いましたね、500倍～700倍に。また社会の求める倫理規範の技術基準の要求水準が非常に高くなっていると。この結果から何が起きているかというと、医師の養成に非常に時間がかかることです。その結果何が起きているかというと、研究を推進する第一線の大学院生が医学部卒業の場合は30歳を超えている。妻子ある人が研究の前線に立ち、アルバイトをしながら学費を払ってです。これが我々の何とも言えない悲しい現実です。本来ならきちんと職に就かれ、サポートされるべき人材が、手弁当で研究をされている。例えば彼らは病院で働いたり開業してしまえばそれでちゃんと収入が得られる人です。だけど研究したいという気持ちがあるから、学費を納めてアルバイトをしながら徹夜で働き、翌日研究をやるというのが現実です。土日もやっている人がいっぱいいます。こんなマゾヒスティックな滅私奉公的なことやっていても、社会が理解をしていただいていない。もっと問題なのは研究では世界に伍してやっていかなければいかんのに、やりきれないという現実がある。生活に疲れ切って、子どもの病気とかで、すぐに帰らなければならないような状況の人が、研究に専念できないですよ、大学院生だって。大学院出たら35歳ぐらいです。何が起きてくるかというと、学振のポスドクも取れない。申請はもう35歳までです。また、アメリカへ行きたいと言うから行ってもらうんですが、帰ってくると30代後半です。それでは職が無いんです。で、そこら辺の問題の議論を去年からずっとしています。一つは30代後半に我々は医学部出身の研究者の「死の谷」があると言っているんです。そこまでいい仕事やっていて、ぽきっと人生折れてしまう。どこかの病院に行って、あとは一医師として一生を終える。これを繰り返してきている、何十年と。これは、僕はストレートに言いますが、国民にとって明らかに損失であると思います。なぜかと言えば、僕らの頃はもっと緩かったけど、今は本当に賢い子が入ってくる。ここには。そういう人材を国の研究なり産業の発展に十分活かさない形で終わらせてしまっていると。それを名古屋大学医学

医師の養成には時間がかかり、滅私奉公でいい仕事をしても、ぽきっと人生折ることも。

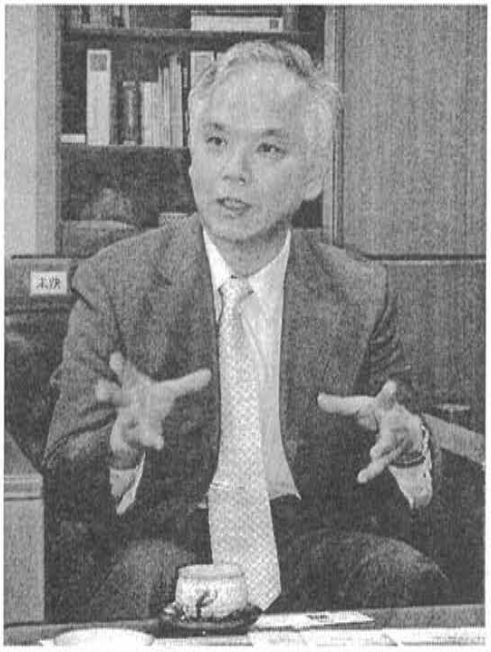
名古屋・中部にとどまらない国際貢献のできる人材をつくる、そのための大学院教育を。

部としてはなんとかしてささやかな抵抗をしたい。その一つが例えば外部資金による寄付講座の展開です。優秀な人材があったら、すぐに就けるようなポストを作る、2年3年でもいいから。どんどんそういうものを開発しようと。それはみんなの一致した意見です。いい仕事をしていたり、アメリカから帰ってきたらその受け皿を作ってやりたい。2、3年そこで働いたら、また自分でどこかの大学などに行くという道も作れるだろうと。それは寄付講座を考えようという一つの契機でした。

教育改革のもう一つは早く大学院に入れるように大学院を変えることです。卒業して7～8年から10年くらいして大学院を出てくるのを、卒業してすぐとか2年後とかにある数の人たちはすぐに大学院に戻しましょうと。そういう人たちに奨学金を出す。国がサポートしてくれないなら、社会が理解してくれないなら、我々が集めるしかないじゃない。ということにトライしようとしています。もう一つはもっと早く大学院に入れて、研究を教えてしまおうというのが、これがMD-PhD制度というもので、いま医学部は6年ですね。これを4年から5年終わったところまでの間に一度休学させて、大学院に出る、博士課程に出る。我々は短期修了というシステムを作っていますが、いま4年で大学院ですが、3年で修了できる条件も決めてあります。できれば、よくできる子は3年で大学院を終わらせて博士号をとらせ、もう一回学部に戻す。そのためには奨学金もつくらなければいかんのです。今までは6年です。親にしてみれば、最低9年、下手したら10年食わしていかなければならない。ですから3、4年食わすようなことを考えなければならない。いろいろ手を打って奨学金ができないかという話をしています。ポイントはお金の問題ではなく、この中部地区のトップレベルの優秀な人材集めているわけですから、早く研究をさせて、新しい医学・医療を開発する。その中で、我々は国際医療人と言っていますが、研究だけでなく、診療だけでも世界に伍して名古屋市、中部地区の医療だけにとどまらない国際貢献のできる人材を作ろうと。これが大学院教育を変えようとしているところの一番のポイントです。

国際的医療人育成

学部教育では、同じキーワードですが国際的医療人育成ということをもう10年近くやっています。それはたぶん他の学部と大きく違うのは、一学年100人ですけど、その中からおよそ10名から15名は、この瞬間にもアメリカとヨーロッパにいます。今年は12名かな。数日間とか一ヵ月ではなく三ヵ月です。六年生にあたる人たちが、三月の終わりから六月まで、向こうで臨床実習をやっています。それを経験している人は、今年の学生を含めると90名を超えています。他の大学からも外国に送っているところはあるんだけど、それはアジアの大学だったり、アメリカでも中西部の小さな大学だったりがほとんど。うちはまず相互に協定を結び、大学間でお互いに学生を送りあうということをやっています。そのかわり授業料を免除してあげるんです。行く先をきちっと選び、協定を結んでいますから、アメリカのトップ5の医学部の中の4つと協定を結んでいます。ハーバードとかデュークとかジョンスホプキンスとかペンシルバニアとか。UCLAも協定結んでいます。いま進めているのがテキサスヘルスサイエンスセンター、これは心臓病のセンターで世界のトップ――エリツィンが心臓病になったとき、そこの所長がアメリカからロシアに飛んで治療をした――です。そういうところで学生が勉強できるんです。ヨーロッパで言うと、例えばドイツだと4大大学があります。そのうちの一つ、フライブログ。それから去年協定結んだのはウィーン大学という16世紀からある大学です。ここはヨーロッパ医学の基を作ったという大学で、ノーベル賞学者が10人ぐらいいます。代表的な人では、ビルロートという胃の手術を初めて開発した人。そこへ今年一人行ってます。イギリスではワーヴィック大学と



集団でアイデアを出しながら
学部運営すすめています。

いうのもあるし、ポーランドではグダニスク大学。ここにはうちの名誉教授が生化学の教授として働いています。

そういう大学に派遣するとき、何を基準に審査するかというと、英語での会話能力が中心になります。TOEFLの点数はもちろん、自分が何をやりたいかということを英語でプレゼンテーションし、英語でディスカッションして、きちっと自己表現のできる人を送ります。3ヵ月間送り出し——途中でチェックを入れることもありますが——帰ってきたらまた報告会をします。僕もいろいろ聞きます。そのほうがアメリカの臨床実習システムとかヨーロッパの臨床実習システムとかと比較して、日本のシステムの弱点はどこかと、何が足りないのかということがよくわかる。具体的に比較ができますから。その中で例えばMD-PhD制度というものができている。例えばデューク大学では40年前からやっていて、今までおよそ120名になった。MD-PhD制度は、普通より長くかかるわけですから普通は嫌がるでしょ。ところが、デューク大学とかジョンスホプキンス大学というアメリカのトップレベルの大学では一学年の一割がMD-PhDです。そういう人たちが何をやっているかというと、別に基礎研究者になるわけではなく、臨床研究をサポートする研究者になるという。ここがずいぶん違います。我々はたくさんの病院を支えていかなければならないし、診療入口が多い中で臨床に追われすぎていて、臨床研究を支える人材を育てることができていない、というか、力が及んでいないということを感じています。だからその意味でもMD-PhD制度を始めてみようかと議論しています。

Young Leaders Program

国際貢献でうちが力入れているのはYLP—Young Leaders Programというものがあります。国際貢献というのは、一つは先進国と発達途上国への二方向性でなければいけないということ。もう一つは先進国で何がどう展開されているかということを調べ、現場にも人を送って体験させてフィードバックをさせることです。いま世界の医療現場はどう動こうとしているかを知ること。また、今度は我々が開発途上国にどういう貢献ができるかということから、伊藤勝基教授を中心に立ち上げ、いま3年ほど過ぎたところです。これは中央アジアを中心とした地域の国の将来の幹部になる人材を推薦してもらい、秋にスタートして夏前に卒業になるという一年間のプログラムをやっていて、実際にたくさんの人材を送っています。だから名古屋大学医学部としていかに情報を発信していくか、常にアンテナを張りながらそれを教育システムの現場に反映させ、そこからまたアジア全体に情報を発信していく。そういうことを我々のミッションであり大きな目標と考えています。

加藤　いろいろなこと考えて進められているんですね。

学部運営は集団で

濱口　医学部の場合、研究科長の下に副研究科長がいま5人いるんです。だから学部の運営を集団で議論してやっているんです。医学部では二週おきに補佐会議というのがあって、私を含めた6人で議論しています。それと合わせて病院との連携では、企画運営会議というものがあります。これは病院長と副病院長と看護部長も入れて議論する、これも二週間に一回やっています。だから補佐の人、副研究科長たちは毎週一回はランチタイムミーティングをやっています。そこで、この一年間我々がやらなければいけない課題は何か、準備しなければならない課題

自分の専門を通じた社会貢献ということを、いま、もう一度問い直してもらいたい。

を、それぞれアイディアを出しながら具体化するため、誰が分担するかということを議論しています。特に副研究科長を5人にしていただいて、負担は増えていますが、学部長・研究科長が、一人で何か思いつき、独断的に動かすというのはまったく無くて、幅広くいろいろな情報を集めながら、何が必要かということが見えてくるような組織になってきたと思います。あと助教授と講師の人たちで学部長補佐というのを設けています。

アシスタントディーン

国際関係担当で留学生担当講師というものがあります。あれは国立大学の悪しきネーミングの一つです。留学生担当の講師が、例えばハーバード大学と交渉しても相手にされないです。それでも我々は、例えばハーバードなりジョンスホプキンスなりに留学生担当の人に、大学を代表して交渉に行ってほしいと送りだしているわけです。これではいけないとう議論が去年ありました。アメリカでは、学部長補佐―英語名でアシスタントディーンとしてそれやっている。ジョンスホプキンスでもハーバードでもそういうディーンがいっぱいいます。うちの大学では、助教授・講師の人にたくさんの仕事をおろしていますが、ふさわしい待遇をしていない。そういうサポートがない。そこで、留学生担当の人には特別に予算を組んで訓練、サポートしながら学部長と直通でいつでも議論できる状態つくっておく事にしました。もう一つ実験動物担当の助教授の人もアシスタントディーンです。だから彼らが大学を代表して出て行く時は対外的に学部長補佐、外国に行ったらアシスタントディーンです。受ける側での印象はずいぶん違います。大学のオフィシャルな代表として交渉に来ているんだということで。そういう機構改革をいっぱいやらないといけないと思っています。

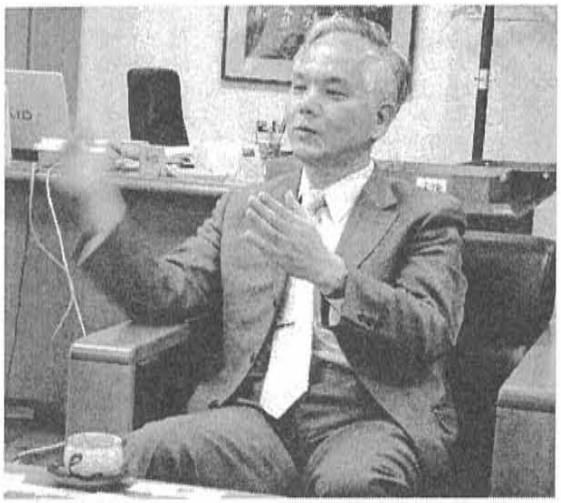
大学全体でやらなければいかんのはペーパレス化です。IT化をすすめ、会議を迅速にやらないといけない。20年前30年前と同じパターンでやっている事が多すぎる。これを直さないと。閉鎖的な文化の中ではずっと維持できているが、気がついてみるとずいぶん遅れた状態になりかねない。そこはいま非常に危険なところです。社会のスピードが非常に速いから。

加藤　もう時間がいっぱいなんですけど、あと二つだけ。大学人全体に向かって何か一言いただければ。先生はいつも医学部ではお話されていると思いますが、読者は名大の構成員ということなんで。最後に生協に何かアドバイスがあればお願いします。

自分の専門を通じた社会貢献

濱口　大学全体としては、自分の専門を通じた社会貢献ということを、今の時代にもう一回問い直す必要があるだろうと。この一言に尽きると思います。自分の学問は自分の満足のためではないのです。

それから生協はですね、もっと新しいトライアルをやっていただきたい。いま文化が非常に多様化していますよね。だからトライアルとして、多様化した文化、学生の潜在的なニーズにそれなりの対応ができると、もう少し変わってくるんじゃないかな。僕は潜在的な需要がものすごくあると思うんです。別にコンビニを作れとか、スターバックスを作れと言うんじゃない。学生の関心はものすごく多様化している。しかし今の子たちは、それをなかなか表現しない。アンケートしてもわからん。オフィシャルな回答しかこないんです。彼ら、本心はなかなか明かさない。でも結構考えている。よく、学生は考えていないとか自立していないとか言われるんだけど、それは知らないだけ、年寄りの思いあがりのようなところがあって、彼らはいろいろなことよく考えている。それをいかに取り込むかということは課題ですね。いまの子は、いわゆる公式的な回答というのは簡単に作りますよ。模範解答を。その模範回答を見て、こんなもんかと思ってしまうと大間違いです。本心は違うこと



に。

二村　僕に声をかけてください、と言う人がいっぱいいました。生協としてもできるだけ学生さんが集まれるような企画を考え、そういう場を作ろうという方針でやっていきます。

濱口　僕、あのカフェクレインは成功したと思いますね。いつ行っても混んでる。あのコンセプトがもっと展開されるとまたイメージが変わってくるかなと思います。人も増えているんです。僕らの時は学生は100人しかいなかった。いま保健学科が四学年で800人いるでしょ。それだけでも多いけど、医師会とかで実習にくるでしょ。大学院も昔は1割、2割だったのが、いま一学年160人になって、四学年全部含めて650、それにマスターでしょ。だからものすごく若い層が増えているんですよ。この10年ほどの間に2倍以上になっている、3倍かな。そのキャパシティがないですよ、受け皿が。物理的なスペースがない。それから彼らに合った環境というのが遅れている気がする。具体的にどうしたらいいのかわかりませんが。再整備でキャパシティだけはやってきた。例えばゼミ室をたくさん作ったんだけど、昔はなかった。

二村　ゼミ室といえば基礎棟の屋上でしたね。暑いところで…。

学生が数人でも勉強を

濱口　新しい中央診療棟にも、積極的にゼミ室を作りました。全部で15室あって多いんですよ。学生が数人集まって勉強するという基本的なパターンでやっている。そういうことをもっと考えていかなければならない。生協さんも、「生」の声をいかに活かすか考えてほしい。アンケートだけでは、ずれてしまうよ。

今井　名古屋大学のキャンパスマスタープランを見させていただきました。うちの理事長が委員になっていまして。ここに鶴舞キャンパスが、東山とか大幸に比べると圧倒的に食事をするスペース、憩いのスペースが少ないと書いてあります。

赤ちょうちん、バーも

濱口　職員、学生の数と比較して少ない。建坪率がもういっぱいになっている。だからカフェクレインのようなところは貴重です。しかし自分の居場所だけはだいぶ確保されているようになってきているからそこへ戻って食べればいい。ほんとはもっとキャンパスの容積率が増えると、我々もいろいろ考えられるんですけどね。こういうところでは、赤提灯とかカクテルバーとか、そういうものもちゃんとやった方がいいと思います。アメリカの大学、けっこうそういうのがあるんですよ。

今井　九州大学でやり始めたと聞きましたので、見てこようかなと思っているところです。

濱口　結構需要があると思います。お寿司とかもね。

加藤　お時間も延長しまして申し訳ありません。ありがとうございました。

（インタビューは4月17日、医学系研究科長室にて。聞き手は名大生協＝今井専務理事、箕浦常務理事、皆川常任理事、加藤理事会室長、二村医学部地区マネージャー、坪食堂店長、高木購買店長。文章と見出しの責任は「かけはし」編集委員会にあります。）

が結構あります。それを率直に心開いて聞けるような場をどう作るかだと思いますね。

二村　先週、クラス交流会というのをやらせていただいて、80人近くの人に集まっていただきました。その中でリーダーの人が自己紹介をやろうって言いまして、みなさんの自己紹介を聞いていると、クラブに入りたいという人がいっぱいいたり、僕の名前を覚えてくださいと言う人が何人かいてびっくりしました。自分の存在を相手に知って欲しいという子が多かったような気がします。

濱口　意欲は高いですよ。本当

言魔

制限が自由の条件

こんなことを言うと怪訝に思われるかも知れない。モーツアルトのレクイエムについての文章の中に「…自由な作曲の可能性はほとんどない。ところが、この制限が、かえって彼の自由の無限な自己実現の可能性の条件をなしているのである」とあるのに出会った（石井誠士「二つのレクイエム演奏」春秋 469 2005.6）。

私は音楽については全くの無知であり、お説を伺うよりほか無い。なにより文中のこの言葉にひかれたのである。やはりそうなのか、音楽においても、という感慨を持った。

日常生活でも、完全に制約のない生活、言わば箍（たが）が外れたような所では何もまともなことは出来ない。毎日日曜日のようになった生活からは活力は生まれてこない。いろいろなことにがんじがらめになった中から、わずかに自由になる時間を見つけてこそ、自分の目指すことが出来る。時間が無くて、と言っている人々は実際に時間がないのでなく、そのための時間を作る意志がないのである。目的があってそれを貫徹する意志があるところには殆ど不可能なことはないのだということを思い知らされることが多い。「仕事は忙しい人に頼め」と言われるのはこのことを示している。

何かを頼まれたときにも、締め切りということが大変大切になる。締め切りもなく、いつでもいいと言っていると何も出来ないのが普通である。その中でもきちんと約束を果たす人がいるが、そういう人は、自らに締め切りを作っているのだ。締め切り効果は大きい。

卒業論文など、もし、締め切りがなかったら、絶対に書けない学生が多いと思う。締め切りに迫られて計画を立て、書くのである。そういう意味から言うと、締め切りに1分遅れたから受け付けられないといった問題は起こらないと思う。勿論、何時間も何日も遅れるようではやはり、締め切りの意味が無くなるけれども。

我々は、何らかの「制限」の中で生きているのである。どういう制限かは問題だけれども。

（T）

問処道得ー問うことのない者に答えは現れない

この頃、何を聞いても全く無反応な学生が居る。何を聞いてもだんまり、ほとんど何も答えない。中には緘黙症とかいう一種の病気のも居る。病気は仕方ないが、健常であってしかも無口がすぎるのには手を焼く。何事も「過ぎたるは…」だ。無口であっても知能が低いわけではないから、口で物を言うのはいやだが、書かせれば書くのである。ちょっと不思議な感じだ。

標題はこれと一脈通じるところがある。問われなければ答えようがない。それは道理だ。ただ、こういうことを言うつもりではない。

何かについて、問を発しようとすれば、それについて皆目知らなくては不可能だ。ある程度知らなければならない。物事はおそらく調べれば調べるほど分からないことが多くなり、聞きたいことが続々出てくるものだ。と言うことは、問いを発

失せ物

すること自体が、自ら知るということ、答えを得ることに他ならないのだ。

叩けよ、さらば開かれん、という言葉がある。これは、叩いた結果開かれるというように受け取られるのが普通だろうが、これとて、叩くことが開かれることなのだ。求めよ、さらば与えられんということも同じ事。

「問処道得」という言葉は、質問の中に、もう答えは現れているということを言う。

大いに問いを発すべく努力しなければならない。（T）

ほんのちょっとした物でも物が無くなるのは不愉快である。無くなるはずはない。只、目に付かなくなっただけなんだ、と慰めにもならぬ事を言ったり、思ったりするが、その目に入らなくなったことが「無くなった」ということなのだ。

確かに、その場で脱いで、洗濯機の中に入れて洗ったのに、干してくれた家内が、靴下が片一方無いと言う。よく脱水槽の中に忘れてあることがある。そこを見たがない。洗濯機の周りも、干場の周りも、ひょっとすると他の洗濯物にくっついているかも知れないと思ってそういうところも見たが、やはり無い。まさに狐につままれたような。こんな靴下の片方などどうでもいいのだが、落ち着かない。目ばかりになって探すが、探している内は出てこない。

その後、洗濯物を取り入れて畳んでいたら、シャツの肩のあたりからぽろっと出てきた。そこも探したのだけれども。

それに限らず、時計や眼鏡など始終探している。亡くなった母などは、財布を捜すのは日常茶飯、それに、よく入れ歯を探していたのが思い出される。遂に、介護老人ホームではその入れ歯を紛失してしまった。相当お金を掛けた物だっただけに惜しがっていたが、他人に取られるはずの物でもない。きっと、何かと一緒に捨ててしまったのだろう。

最近、私はとみに眼鏡を探す時間が多くなった。掛けていなくても大体見えるし、掛けていても大してよく見えるわけでもないので、つい外してしまうからだ。それでも、車の時は必需品だ。とんでもないところから出てくる。きちんと置き場を決めておかなければと思うのだが、なんだこんな所にと見つかった途端に、そうしなければと思っていたことも忘れてしまい、又同じ事を繰り返す。

本の紛失にも悩まされる。確かそこに置いたはずだと思うところにない。シリーズの1冊など、必要なところだけがない。使った後、元に戻してないからだ。わざわざ必要だからと別の所に置いておいてそれを忘れてしまうことがある。書類などそれが甚だしい。持っていく必要があって、取り出しておいてそれを見失うのである。ばかばかしいにも程がある。

中には遂に見つからない物も幾つか有る。貸したのだろうか。取られたということは無かろうと思う。いつぞやは本棚の向こう側に落ちていたこともあったから、今度引っ越しするときには出てくることを期待していたが無かった。教授会の内職でせっせとやっていたことがぎっしり詰まった物がいまだに見つからない。罰が当たったか。以前、随分さがしていた雑誌が目の前にあったことがある。その、イメージが違っていたのだった。

この頃は、書類なども封筒に入れると中身がわからなくなるというので透明のファイルがはやりだ。ただ、それも少しのうちはいい。しかし、それが貯まるとまたまた同じ事。イヤハヤ、整理整頓が出来ないからなのだろうが、何か何時も探しているような人生だ。私だけなのだろうか。（T）

新フィールド・ノート　―その95―

カンブリア紀の大爆発

情報科学研究科　広木詔三

今年、つまり二〇〇六年は、梅雨に入るずいぶん前から雨がちで、初夏から梅雨に突入したようなのだ。来る日も来る日も降る大粒の雨はどうみても、三月から四月にかけて降る菜種（なたね）梅雨どきに降る雨とは感じが違う。その後六月に入って晴れた日が続くようになり、名大祭の期間中もずっと晴れたのだった。かつては名大祭というと、いつも雨にたたられていた時期が存在したのが嘘のようである。

ようやく沖縄で梅雨入り宣言がなされ、しばらくして忘れかけた頃に名古屋でも雨が降り始めた。この時期は、紫陽花（アジサイ）があちこちの庭に咲く。梅雨どきには紫の花の色が映える。

今日は六月二十二日の木曜日。雨の中、北部生協の「ゆ～どん」へ赴く。生協教職員委員会主催のビア・ガーデンの招待券を手に入れたのである。私もかつて、理事を務めていた時期がある。かけはしの原稿を仕上げるために早めに引き上げたが、雨はまだ降り続いている。いつまで降り続くのだろうか。この原稿が日の目を見るころには、梅雨は明けているだろうか。

パソコンや携帯電話の普及で活字文化の衰退が懸念されていたが、新しい本の出版は後を絶たない。目から鱗という言葉があるが、まさにそれに相応しい本が現れた。アンドリュー・パーカーの『眼の誕生』である。

古生代の最初の紀であるカンブリア紀に現生につながる多くの動物門が出現したことは有名な出来事である。その現象が生じた理由は謎であった。パーカーによれば、それは眼の発明がなせる技だというのである。光学にも造詣の深いパーカーは、カンブリア紀の海が暗闇に覆われていたのではなく、光輝く色とりどりの世界であることを明らかにした。複眼という独特の構造の眼ではあるが、当時すでに多様な色彩を識別しうる能力を獲得していたことをパーカーは実証したのである。

三葉虫を含む節足動物が主役のカンブリア紀には、食うものと食われるものが、眼を通じて、多様な共進化を遂げさせた、というのが彼の考えである。捕食動物は獲物をもとめて眼が前方を睨むが、被食動物は、自分の餌を探すと同時に、捕食者を警戒するために眼球を前後に動かせる飛び出した眼をつけるという。そう言えば、現存の蟹の眼は突き出していて、前後左右に回転できるようになっている。

パーカーの新説は、節足動物の多様性の起源は説明しうるが、現生につながる多くの動物門の出現までは説明しえない。私たちヒトは、現在の分類体系によれば、脊椎動物亜門に属し、ホヤ（尾索動物亜門）やナメクジウオ（頭索動物亜門）を含めて脊索動物門にまとめられている。この脊索動物の祖先と見られているピカイアという名の化石がすでにカンブリア紀の動物化石の一群の中に認められている。節足動物の大繁栄のかげにひっそりと生息していたらしい。カナダのロッキー山脈の一画のバージェス頁岩という堆積岩の中で見いだされた数多くの動物相は、数年前に亡くなったステファン・ジェイ・グールドの指摘の重要性を示している。彼は、生き物の進化はなだらかなはしごを登るようなものではなく、ときどき急激に、そしてしげみのように多様に適応放散するものだということを、強調してやまなかった。

生物の進化の過程において、突然変異と自然選択は重要な役割りを果たすけれども、それだけですべてを説明しようとする狭い進化観に、グールドは常に警告を発してきた。新しく種が誕生するときは比較的急激で、いったん生じた種はそれほど大きな変化を遂げないという彼の断続平衡論は、さまざまな批判

を浴びながらも、今なお生き物の進化の歴史に対する見方の重要な刺激の一つとなっている。

ダーウィン以来、生物は長い時間をかけて徐々に進化したという考えが浸透してきている。確かに生命が誕生してから三十八億年という夢のように長い時間が経過している。しかし、その三分の一以上は、バクテリアという単細胞の生物が地球上を占めていたのである。バクテリアといえど極めて複雑な構造と機能を有しているが、遠い過去の地球上を想像すると、生態系としてはごく単純なものであったであろう。現在は古細菌と真正細菌という二大グループが存在していることが知られている。これらのバクテリアの祖先は、水中では三次元的に存在しえても、地表では数十ミクロンという薄い膜のような状態で平面的に広がっているだけに過ぎない。もちろん、バクテリアがいつ陸上に進出したかは今のところ知り得ない。

いまからおよそ二十億年前後に真核生物が誕生したと化石から推定されている。現生の多細胞生物は、このときに起源した真核生物の子孫であると考えられているから、この真核生物の出現は地球上の生物の歴史における極めて重大な事件と言える。

この真核生物の起源の説明として細胞共生説が提起され、現在では基本的に受け入れられている。現存の真核生物の細胞に見られるミトコンドリアや、クロロプラスト等の細胞内小器官はもともとはバクテリアだったというのである。真核生物の祖先はミトコンドリアの祖先を食べていたというわけである。

バクテリアはその系統の種類ごとに独特の特異な能力(機能)を有している。かつては正真正銘の独立したバクテリアだったミトコンドリアの祖先は、当時酸素濃度が増大しつつあった海水中において、酸素呼吸の能力に秀でた能力を獲得したに違いない。真核生物の祖先の実態は明らかではないが、ただ餌を食べるだけのぼんくらな真核生物の祖先が、優れた呼吸能力をもったバクテリアを食べるという、両者のあいだには捕食関係が成り立っていたと推測される。真核生物の祖先は、ミトコンドリアの祖先を食べているうちに、消化せず、体内に同化させて、その呼吸能力をうまく利用するようになったに違いない。真核生物の祖先と優れた呼吸能力をもったバクテリアとのあいだには食う食われる関係にあったと考えられる。このことは当時の生態系において食物連鎖の関係が存在していたということである。

ところで話は変わるが、アリス・マンローというカナダの女流作家の『イラクサ』という本を手に入れた。九つの短編集の中に刺のあるイラクサをタイトルにしたものがあり、訳者がそれを訳本のタイトルにした。ほろ苦い人生、凝縮した人生、一瞬と永遠。いろとりどりの短編の一つに『なぐさめ』という題のものがある。その主人公に生物学の教師が出て来る。彼がふと取り落とした本は古生物学のテキストで、カンブリア紀の大爆発のことが記されていることが仄めかされている。進化論と対等にキリスト教を教えよという主張や運動が、彼の学校にも及ぶが、彼は信念をもって反対する。マンロー自身は本の中で自分の主張は出していないが、彼女はなかなかの知識人である。

話はさらに変わるが、五月二十六日に、名古屋大学で日本教育法学会の公開プレシンポジウムが開催された。教育基本法が変えられようとしているというのだ。恥ずかしながら教育基本法に目をとおしたことがなかった。五月の国会で審議された法案の内容は、国民主体の教育から国家が支配する教育へと変えられようとしている。特別委員会までつくって、国民に知れ渡る前に通そうとしているそうだ。幸い、先の国会では通らず、継続審議となった。だが、戦争のできる国つくりを目指しているという噂は聞いてはいたが、ほんとうだったのだ。大学に干渉する条文も新設されている。

今日は、二十七日、日曜日。ビールで一杯やったあとの文章は、かなりの修正を要した。

ニュースに一喝！

材割り

こんな言葉は初めて聞いた。ワープロでは一発で出てきたから、市民権を得ている言葉なのだろうか。広辞苑にはない。

雑木林、里山などで、生木を斧や鉈などで割って、その中の虫の幼虫を探すことを言うのだそうだ。その割られた生々しい姿をテレビで見て、なんということをと、人のやることのひどさに腹が立った。炭焼きなどに使う木などがめちゃめちゃにされている。それを取り締まるということも、里山を管理する人が自衛するほかないらしい。

そういうことをするのは、虫を捕って売ろうとする連中だ。クワガタ一匹が14万円の高値で取引されたという。そんな虫にそんなお金を出す人がいるからこういう事が起こる。しかも、産地によってその形に微妙な違いがあるらしく、ブランド産地というものがあるという。

だいぶん前からカブトムシ類をお金を出して買うということを聞いていた。それで外国から輸入する物も多いらしい。外国から輸入した物が野外に放たれたり、逃げ出したりして、日本の生態系を壊しているという。魚でもそういうことを聞く。

人間はお金になることは何でもやる。それが後で取り返しのつかないことになることがある。

この材割りということは、こういうお金になる虫を成虫になってから捕まえるのはなかなか難しいから、木の中にいる幼虫を能率よく捕らえるためだ。そのため、木も台無しになるし、虫は一網打尽、これで絶滅しても、金さえ儲かればいいというつもりなのだろうか。金ほど恐ろしい物はないし、こういう人間ほど愚かしいものはないように思える。

（田　2006・2・11記）

中休み

今年の天候は非常に不順である。もう、天候不順が久しいから、不順が正常なのかと変な錯覚にとらわれる。冬の大雪は尋常でなかった。しかも一転暖かい日がやってきて、やれやれこれで長い冬ともお別れかと思っていると、又寒さのぶり返し。新雪雪崩も多かった。

そんな冬を過ごした後、桜の季節、早い到来であった。しかし、開花してからもやっぱり奇妙な天候。低温が続いたから、花は長持ちした。花見にいい日は少なかった。日本列島を桜前線が北上するにも随分日数がかかった。日本列島の南北の長さを思い知らされた。そんな異常気象にもかかわらず、梅雨入りは殆ど平年どおりだった。ところが、梅雨入りした模様などと歯切れの悪い梅雨入り宣言の明くる日からは各地とも晴れという予報そして、それがしばらく続くという。つまり、梅雨に入ったと思ったら途端に「梅雨の中休み」というのだ。しかし、こういうのは普通の感覚から言えば「中休み」とは言いにくい。どういったらいいのか、適当な言葉が見つからない。実際には、予報通りには成らず、まと

もな梅雨のようだが。

中休みと言われたときには、とにかく五月によく降ったから、さもありなんと思ったものだ。五月の異常もかなりなものだった。日照時間が例年の半分以下というところも多く、野菜などが被害を受けて高値になり、作付けをした米なども注意しろと言われていた。どう注意していいのか、素人には分からないのだけれども。

その中にも、前後にないようないい天気の日もあり、「五月晴れ」という言葉が復権した。元々、梅雨空の中のたまの晴れ間を言ったのが、暦が新暦に変わってからいつの間にか、すがすがしい五月の晴れ間を言うようになってしまっていた。それが、本来はこういう意味なのだというような解説もされていた。（田２００６・６・15記）

インフルエンザ対策

去年頃から「鳥インフルエンザ」のことがいろいろ取りざたされていた。鳥インフルエンザで鶏が死んだのを隠したり、報告しなかったりしたために、養鶏場そのものがつぶれてしまったり、経営者が逮捕されたり、自殺者が出たりした。最近になって、発症はしなかったが、かなりの人が鳥インフルエンザに感染していたということが報道された。

東南アジアの諸国に始まり、ヨーロッパにも拡大した。鳥は世界中股にかけて飛び回るから、人間の病気のように、水際で食い止めるのは難しい。鳥インフルエンザが鳥の間でだけ流行っている分には、被害は鳥だけですむ。しかし、既に鳥インフルエンザが人にも感染し、死人も何人か出ている。これが人から人へ感染するようになるかも知れない。と言うより、変異を繰り返して、必ずそうなるのだという。その辺のメカニズムは素人にはなかなか分からないが、専門家がそう言っているから、我々はそれを信じるほか無い。

この冬はインフルエンザの大流行が早くから取りざたされていた。かつてのスペイン風邪のように大変な事態を予測する者も居た。幸いまだその兆候はなく、大変な寒さであったが、無事過ごせたようだ。しかし、この頃の風邪は冬とは限らない。油断できない。

その予防法や対策がいろいろ報道され、抗ウイルス薬の準備がどうのこうのと言ったり、手洗いうがいが大切なことを言ったりしている。いずれも大切なことだが、不思議と言われていないのが、自分の身体を鍛えて丈夫にし、抵抗力を付けることだ。土台無理だということなのか。中には、そんなことを言ってもという人達もいるだろうが、一般の健康人には先ず体力を付けることを促すべきではないか。と言っても大したことではなく、早寝早起き、規則正しい生活、好き嫌いをせずに腹八分目、余りに着ぶくれするのも、余りの薄着も良くないだろう。出来れば適度の運動も望みたい。運動と言っても、わざわざスポーツクラブに通うこともない。心がけて、少しでも「歩く」事だ。医者や薬に頼る前に先ず自分の抵抗力を付けるのが、一番の対策だと思う。最近、治療より予防と言うことが、医療の本筋に成りつつあるということだ。誠に好ましいことであると思う。

自分の健康を管理して病気にならないようにしようなどということを一々言わないのは、そうするのが当たり前の前提になっているからだろうか。しかし、当たり前のことも言わなければ無視されてしまうということは色々例がある。話がそれるので、今はこれ以上は言わない。

（田　２００６・１・20記）

理学部利用者懇談会の報告

5月24日12時から理学部物理会議室において生協利用者懇談会を開催しました。学生・院生・教職員20人と生協職員・役員4人が参加しました。

1本集会の趣旨説明

年に1～2回生協利用者の皆さんの意見を直接聞く機会を設けています。

今回は、理系に新しい福利厚生施設「FORESTI」が誕生し、総代会も近いので、生協のことを知って頂くことを中心に、懇談会を準備しました。

2生協の組織及び事業活動

・生協とは

生活協同組合です。名古屋大学を職場とする、あるいは勉学の場としている人たちが、自らの生活を守るために出資して協同組合をつくりました。それが名大生協、生活協同組合です。

・生協の運営は

組合員の出資金で運用、利潤は組合員に還元するので、一般の企業と比べ利用者のメリットを最大限引き出すことができます。組合員のみなさんの要望や声をもとに店舗や事業活動を行います。今回の利用者懇談会も、そうした取り組みの一つです。生協の営業・運営方針は、年に一回の総代会と毎月の理事会によって討議され、執り行われています。

・総代会とは

一般企業の株主総会にあたるもので、組合員の代表（総代）によって、一年の運営方針を決めます。例えば、生協職員の皆さんの給料なども決めます。

・加入の呼びかけ

生協に入る・・・つまり、出資していただくと様々なメリットがあります。

例えば、書籍10％割引などです。これを機会に、ぜひ加入して下さい。

3新しい店舗「FRONTE」の紹介（村瀬東地区マネージャー）

理系書籍としては大学生協書籍部としては日本一の床面積を誇るお店ができました。すぐ隣には綺麗なCafeもできました。Cafeは朝8時から夜8時まで営業、オリジナルタンブラーを使った注文ならドリング20円引きです。

書籍は朝10時から夜7時までの営業です。

4意見交換（参加された方全員に言発言してもらいました）

みなさんからいただきました発言の内容を、項目毎にまとめてみました。

運営全体に関する事項

○生協に加入したいが・・・

▽出資金2万円でお願いしています。出資金は退職あるいは卒業されるときにはお返しします。（河合）

○お店の名前が決まった経緯が不明。せめて看板が出る前に応募者へは知らせてほしかった。

▽この件に関しては、きちんと情報開示するよう教職員委員会からも働きかけます。（河合）

○声カードの返事が遅い。書いた側としては2週間が限度。返事が遅いと「声を聴く」というポーズだけかと思われてしまう。

○声カードなどによって改善した内容もたくさんあると思うが、それが私たちに伝わってこない。もっと積極的なフィードバックが必要。

▽みなさんの意見をフィードバックすること、特に声カードの反応などを改善するのは自分の仕事だと思っています（村瀬）。

○生協は正規職員より契約職員やパートの方が多い。こういう経営には問題があると思うが・・・・

▽生協は大勢の学生アルバイトの皆さんに支えてもらっています。一般企業に比べて時間単価など恥ずかしくない金額です。生協でアルバイトしながら学生生活を支えている人たちもたくさんいます。こうした面でも学生を支援しています。（河合）

書籍関係

○雑誌を定期購読しているが配達してもらえないか

▽利用班があれば配達します。決済はCOPAカードです。3人で利用班を作れます。（村瀬）

○なかなか生協に行ける時間がないので営業時間を延長してほしい。

○書籍が充実したのは良いが文房具も一緒に買えると良い。

○北部書籍はどうなるの？

▽理系書籍に移転。空いた場所は購買の面積を増やします。
○建物のデザインがちょっと冷たいのではないか。木目を生かした暖かい雰囲気がほしかった。
▼（後日いただいた村瀬さんのコメント）回答は特に必要ないと思いましたので、だまっていましたが、今回の建物のデザインは大学の施設整備推進室の意向が強いと思います。この間新しく建っている建物や地下鉄駅はやはりガラスを活かしたデザインとなっています。私どもスタッフとしては気に入っているデザインなので、建物の外観と内部が調和するような什器を選びました。デザインは好き嫌いがあるので、万人が気に入るというのは難しいとは思います。

配達弁当関係（生協弁当部内線:7553 外線:781－8024、当日朝10時30分まで受付）

○お弁当の値段は？
▽480円です。コンビニ弁当よりよい品質のものを提供しています。（河合）
○弁当は一個でも配達してもらえますか？
▽朝10時半までに注文してもらえれば一個でも配達します。一ヶ月のメニューもあるので、是非ご利用下さい。（河合）
○お弁当のバランスがよい。
○ごはんとおかずが別々の容器に入っているのでご飯も美味しくいただけてよい。
○前の弁当より内容がよくなった。
○お弁当のボリュームは男の人はこれで丁度良いが、女性には多いかも・・・
▽配達弁当事業は、注文数が減って現在赤字経営です。これを機に、ぜひご利用下さい。利用者数が増えれば、女性向けメニューの弁当もできると思います。（河合）
○容器を再利用する・・・となっているが・・・
▽黒いシートを剥がして、白い容器の部分をリサイクルします。（河合）

食堂関係

○カフェテリアのメニューだが、毎日だと飽きてしまう。
○生協の食堂には女性向けのメニューがあったので嬉しい。
○綺麗なCafeができたので行ってみたい。
○理系食堂を利用していたが、メニューが限られているので飽きてしまう。
○中華がなくなったのは寂しい。理系食堂の中華を充実してほしい。
○食堂のイスが全体として減ったのではないか。
○理系中華がなくなった分、待ち時間がかかるのは方針として変。
○理系で一番の問題は食堂の席数不足、結果的に20減となったのは遺憾。
▽大学の予算もあることなので、どうしても最大公約数的になってしまう。それでも皆さんの意見があるからこそ厚生施設が充実できる。もっと意見をあげてほしい。（河合）

その他

○理系コンビニをよく利用するが、総菜パンを増やしてほしい。菓子パンばかり残っている。
○外見など綺麗にするのはいいが、外の目を気にしすぎている。もっと実質を充実してほしい。

5まとめ

たくさんのご意見を、ありがとうございました。短い時間で、話し足らなかったかたもおおいと思います。ここで述べられた意見は、村瀬マネージャーにも直接聞いてもらいましたので、お店の運営に生かしてもらえると思います。運営全体の意見については、教職員委員会として理事会等に反映できると思います。食堂の席数が減ったことについては、同様の認識を持っておりますので、名古屋大学全体の厚生施設の配置なども含めて今後議論していきたいと思います。このような機会を、また作りますのでよろしくお願いします。

最後に、フロンテからのご案内です。
Booksフロンテ営業時間10時～19時（平日）
Cafeフロンテ8時～20時（平日）
・土曜はBooks&Cafeともに10:30-14:30
ご注文・お問い合わせはお気軽にどうぞ
ご注文先 fronte@nucoop.jp
ご注文用HP和書 http://www.honya-town.co.jp
TEL：052-781-9819，FAX：052-781-9073

かけはし 5・6月号の感想

これからもサービスの向上を
★今回のクイズは、小学生の長男が答えて、是非応募してくれと頼まれたので応募しました。大学の財政が苦しくなっていく中、生協の発展が目立ちますが、これからもサービスの向上に向けてよろしくお願いします。
【組換え野郎】

ハイキング楽しそう
★ハイキングの写真がとても楽しそうでした。僕たちの研究室でも今度ハイキングに行こうと考えています。
【徳田剛史】

ハイキング行きたくなった
★ハイキング＋バーベキュー＋温泉の記事を読んで本当に楽しそうですね。私も行きたくなりました。
【JJJ】

ハリーポッター行ってみたい
★ハリーポッターの上映会、行けたら行ってみたいと思いました。
【佐々路佳】

また企画してください
★ハイキング、豊川の企画は日にちが合わず残念でした。また是非、企画してください。
【鵜飼 モト美】

フルーツパーク行ってみたい
★東谷山フルーツパーク、私も行ってみたいです。そしてハリーポッター観に行きたいです。
【齊藤弘子】

東谷山また行きたい
★東谷山散策路、私も3月の終わりごろに散策してきました。山頂からの眺めは確かに良いものです。今回の記事を読んでまた行きたくなりました。
【いちろう】

ビアガーデン行きます
★・クイズは簡単でした。そういえば、去年のこの時期のクイズの回答が「77」だったような気がしますが…。
・今年も総代会の時期がやってきましたね。生協の運営を決める大事な会だと思いますので、しっかりと議論をし、総代全員で可決されるようにがんばってください。
・今回こそはビアガーデン行きます!! 割引券忘れずに持って。料理期待しています!!
・平和ミニツアー、また開催するのであれば、是非参加したいと思います。
・ニュースに一喝の「はい」について読んで、卒業式の時に「はぁ～いっ」と返事をした人がいたことを思い出しました。発音の仕方によってだいぶ印象が変わるものですね。
【すのっち】

効率のみを求めては…
★効率のみを突き詰めていくと、カプセル化と隠蔽、ブラックボックスへとなっていく気がします。効率のみを求める構造がよくないと思う今日この頃です。
【K@Z】

責任を持って行動したい
★「士」という言葉には、自分に対する責任を持っていると思う。僕は今工学部で勉強していますが、自分に対する責任や倫理が大切だと学びました。別にこのことは勉強に関してだけではないことなので、いろいろなことに対して倫理などを考えながら行動したいと思う。
【ふーちょ】

差別と区別
★『ニュースに一喝！』の『男女共同参画社会』にあるように、差別と区別を混同している人が多いと思う。差別用語というレッテルを貼り、言葉狩りを行う発想も根っこは同様だと思う。
【だるまおとし】

魔言・ニュースがよかった
★久しぶりにクイズにチャレンジしましたが、簡単に解けてよかったです。前回はとても難しかったという意見がのっていたので、そちらもためしにやってみれば良かったなと思いました。本誌では魔言とニュースに喝！が面白かったです。言葉のひとつひとつを考え直すことは今とても大事なことかもしれません・・。
【のうのう】

78が総代会の回数とは
★クイズの78が総代会の回数だとは思いませんでした。マニアックですね。
【kyuri】

編集ご苦労様
★毎回、かけはしの編集ご苦労様です。特に記事を集めるのは大変でしょうね。
【赤塚保雄】

しの輪

意見と通信

戦争遺産は大変貴重

★平和ミニツアーを読んで。私も含めて戦争を知らない世代にとって、このような戦争遺産は大変貴重であり、また、その調査報告を読むことができて良かった。現在、改憲の是非が問題となっていますが、戦争だけは絶対にしてはいけないということを改めて感じさせられました。【DC5】

営業時間が長く大変便利

★理系食堂跡に建てられた本屋は、営業時間が長く、大変便利です。どうもありがとうございます。【だるまおとし】

フロンテを紹介して

★理系地区にできたbookフロンテの紹介やCafeフロンテのメニューの紹介をお願いします。【JJJ】

北部書籍移転が残念

★北部書籍が移転することが残念です。不便になってしまうので。【DC5】

Booksフトンテに期待

★Booksフロンテはとても期待しています。オープンしたら詳しく紹介して欲しいです。お店の場所が遠いのがなんですが・・・。【のうのう】

インタビュー記事楽しみ

★・フロンテの特集してください。
・浜口医学研究科長のインタビュー記事、楽しみにしています。【すのっち】

FN百回には特集を

★はじめてお便りします。毎号、広木先生の新フィールド・ノートを楽しみにしています。100回まであと少しですね。その際には是非特集をおねがいします。【いちろう】

次回は温泉付き登山企画を

★いつもお世話になっております。毎回楽しい企画、ありがとうございます。次回は温泉付きの登山の企画など、お願いできたらと思います。【鵜飼 モト美】

具体例を挙げれば興味も

★総代会についてもっと意見が反映された例などを挙げればみんなも興味をもってくれるのでは、と思います。【kyuri】

教職員委員会活動日誌（2006年5-6月）

月　日	事　項	場　所
5月 8日（月）	5月度常任理事会	ゆ～どん
11日（木）	豊川海軍工廠見学ツアーのまとめ	名大職組書記局
12日（金）	5月度第1回教職員委員会	ＩＢカフェ
15日（月）	5月度理事会	フレンドリィ南部食堂
18日（木）	平和憲章委員会	名大職組書記局
18日（木）	豊川海軍工廠見学ツアー参加者の会	名大職組書記局
19日（金）	豊川海軍工廠見学ツアー参加者の会	名大職組書記局
22日（月）	フォレスト竣工記念式典・フロンテ祝賀会	グリーンサロン東山
22日（月）	豊川海軍工廠見学ツアー参加者の会	名大職組書記局
24日（水）	理学部利用者懇談会	理学部物理会議室
24日（水）	総代会議長打ち合わせ	ゆ～どん
25日（木）	総代会リハーサル	南部食堂ホール
25日（木）	豊川海軍工廠見学ツアー参加者の会	名大職組書記局
26日（金）	第78回通常総代会	南部食堂ホール
28日（日）	大学生協連東海地域センター総会	東海会館
29日（月）	5月第2回教職員委員会	ＩＢカフェ
29日（月）	豊川海軍工廠見学ツアー参加者の会	名大職組書記局
31日（水）	豊川海軍工廠見学ツアー参加者の会	名大職組書記局
6月 2日（金）	映画「パッチギ」上映会と安川寿之輔講演会	豊田講堂ホール
3・4日	名大祭企画「ミニ平和資料館」開催	文系共同館
5日（月）	6月度常任理事会	ゆ～どん
7日（水）	栗田食堂部長送別会	フレンドリィ南部食堂
12日（月）	6月度第1回教職員委員会	カフェFronte
15日（木）	平和憲章委員会	名大職組書記局
19日（月）	6月度理事会	フレンドリィ南部食堂
19日（月）	役員報酬検討委員会	フレンドリィ南部食堂
28日（水）	名古屋大学・生協懇談会	グリーンサロン東山

夏の組合員交流企画報告

映画上映会
「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」に10人参加

6月21日（水）に話題のハリー・ポッターシリーズ第4弾の作品「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」の上映会を北部厚生会館2階「ゆ～どん」にて開催した。劇場で見逃した方など学生・院生・教職員の組合員10人が入場された。

ちょうど夏至の直後でありまだ外は明るかったが定刻にスタートした。会場のゆ～どんにはカーテンがなく、加えて北部厚生会館2階の冷房が故障して修理部品の入荷に時間がかかるとかで明るいは、蒸し暑いはの最悪の状況での上映となった。

最近のプロジェクターは輝度も明るくはじめは少し見難かったかもしれないが、日暮れとともに楽しい作品に引き込めれていった。

ビアガーデンには40人

6月22日（木）「ゆ～どん」での午後5時30分開店のビアガーデンはお店の準備が遅れて、組合員の方がチケットを片手に待ちぼうけとなってしまった。ポップ貼りや横幕の準備、ビアサーバの調整に手間取って15分程遅れてスタートした。

今日も冷房が効かずむしむしとした会場には待ちかねた組合員で席が満たされていった。最終的な参加者は40人となった。

日本国内や世界の地震等の災害救援を冠につけて利益の全額をユニセフを通して募金するという企画にして4回目。毎回のように大きな災害が起きている。今回はインドネシア・ジャワ島中部地震（5月27日）の被災者救援義捐金として利益の13,437円をユニセフに送金いたした。皆様ご協力ありがとうございました。

映画「ハリー・ポッターと炎のゴブレット」参加者の感想（7人分）

(1)企画をなんで知りましたか
ポスター(3)、知人友人(2)、かけはし(1)、ビラ(1)

(2)参加の動機は
作品に惹かれて(4)、友人の誘い(2)、映画好き(1)

(3)作品について
○おもしろかった。(3)
○楽しかった。
○ハラハラドキドキでおもしろかった
○すばらしい
○長編作品なので、キレイに映画としてまとまるのか心配したが、内容を損なうことなくまとまっていたと思いました

(4)次回みたい作品
○poseidon

(5)今回の企画について
○暑かった

名大生協

学内便

「かけはし」編集委員会行

山　　折　　り

○氏　名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　組合員証番号＿＿＿＿＿＿＿＿

○所　属＿＿＿＿＿研究科／学部／センター＿＿＿＿＿専攻・課／学科・掛（教職員・院生）

○連絡先＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿内線＿＿＿＿＿＿＿＿

○誌上匿名希望の方はペンネーム＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

山　　折　　り

アンケートに
ご協力願います。

第　266　号

クイズのこたえ＿＿＿＿＿＿＿＿

☆今月号を読んでの感想

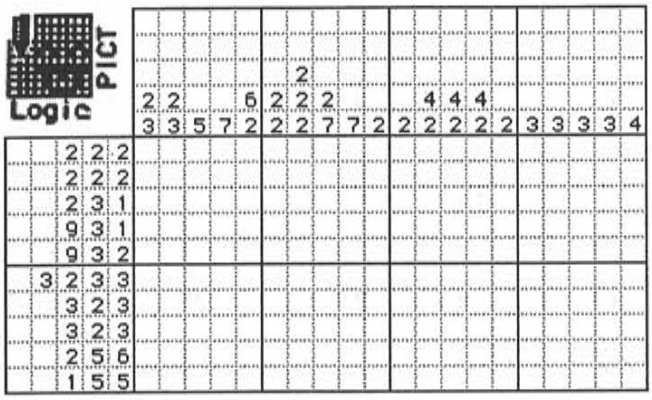
☆記事にしてほしいこと。生協へのご意見やみなさんからの通信をぜひ。

COOP クイズへの応募、アンケートの回答は、http://kyoshoku.coop.nagoya-u.ac.jp/kakehashi/answer.html　から送信できます。また、e-mail: kyoshoku-c@coop.nagoya-u.ac.jp でも受け付けます。必要事項をもれなく記入してください。

CO-OP QUIZ

No．２６６
2006月7・8月号

縦と横に書かれた数字にしたがってマスをうめていくと絵（または文字）が現れます。それは何でしょう。（ヒント＝濱口先生といえば）



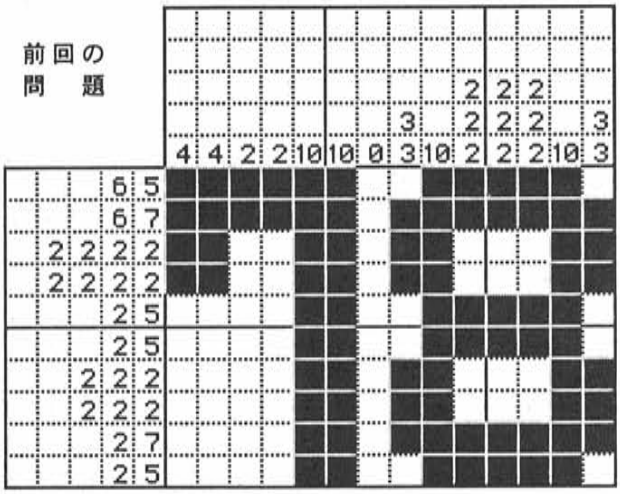
****

クイズが解けたらぜひ応募してください。クイズの嫌いな方は、ご意見だけでも歓迎します。

****

前回の正解は「７８」でした。解き方がまだわからない方は、解答の絵の数字と黒マスの関係をよく見てください。

前回の問題



****

あなたもLogicの問題を創作（出題）してみませんか。問題の投稿も歓迎します。手描きでもＯＫ。
採用の方には図書カードを進呈。

第２６５号の当選者

・応募総数　……15人
・正解者数　……15人
・当選者　（敬称略）
安井幸夫（理学研究科）
藤嶋裕太（工学部）
鈴木俊哉（生命農学研究科）
高井一輝（情報科学研究科）
鵜飼モト美（総合保健体育科学）
以上の5人の方に図書カードをお送りします。

応募要項

○締め切りは8月17日
○発表は本誌、10月号
○正解者（但し、①組合員＝当選後ご加入も可、②意見・感想記入者）の中から、抽選で5人の方に図書カードをさしあげます。
○生協への意見・要望をどしどしお寄せ下さい。

化　石　山　に　行　こ　う

一緒に平和について学びましょう

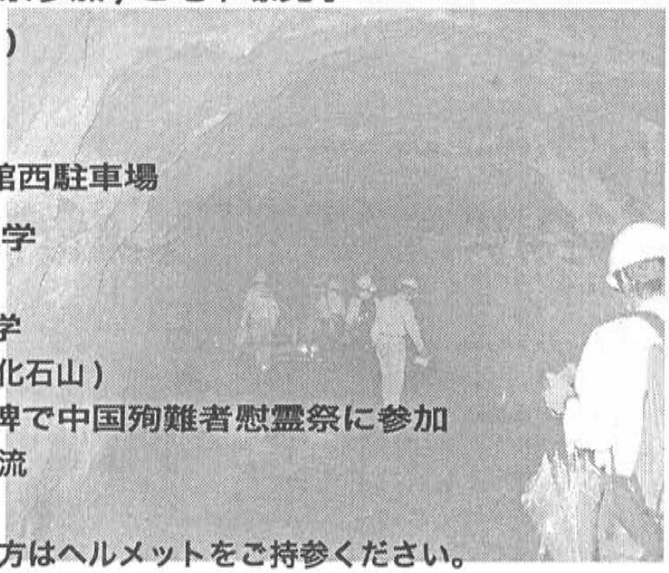
日中不再戦の誓い碑（慰霊祭参加）と地下壕見学

開催日：9月17日（日）

参加費：無料

集合・出発：10時博物館西駐車場

午前中に化石博物館等の見学
昼食（自己負担）
13時～化石山・地下壕見学
瑞浪市明世町戸狩山（化石山）
14時～日中不再戦の誓い碑で中国殉難者慰霊祭に参加
慰霊祭終了後：参加者の感想交流
17時　大学帰着予定
持ち物：長靴、懐中電灯、ある方はヘルメットをご持参ください。



この地下壕は昭和19年から20年にかけて強制連行してきた朝鮮人と中国人を使って掘らせたもので、空爆に強い地下軍需工場を造ろうとした。ここでの労働は1日2交代で24時間働かせて与えられる食事は小麦粉とこぬかで出来た粗末なパンを1日に3個だけであった。重労働と栄養失調により39名もの中国人労働者がこの地でなくなった。中国人殉難者瑞浪供養会では満州事変の発端となった柳条湖事件の9月18日に近い日曜日に毎年慰霊祭を開催している。

名古屋大学消費生活協同組合

☎ <052>781-1111（内線7540）

●書籍（和書・洋書・雑誌）に関するご相談は
BooksFronte（内線7544）南部書籍（内線7551）
医学部書籍（内線5208）大幸書籍（内線5552）
●文具・事務用品に関するご相談は
北部購買（内線7542）南部購買（内線7549）
医学部購買（内線5209）大幸購買（内線5552）
農学部購買（内線7557）
●レストラン「花の木」（内線7605）

●旅行（国内・海外）・宿泊に関するご相談は
北部旅行・サービスセンター（内線7543）
南部旅行・サービスセンター（内線7550）
医学部旅行・サービスセンター（内線5213）
●印刷とネットワークに関するご相談は
印刷・情報サービス部（内線7552）
医学部印刷（内線5212）
●パーティー料理・弁当に関するご相談は
弁当部（内線7553）理系食堂（内線7555）